

大学のない地方中小都市と大学生を繋ぐポストコロナにおける交流のあり方

ーパターン・ランゲージを活用した域学連携のデザインー

Designing Post-COVID Interaction between Non-University Cities and University Students Using Pattern Language

大宮 理夏子・小林 重人 (札幌市立大学)

Rikako OHMIYA, Shigeto KOBAYASHI (Sapporo City University)

要旨 大学のない地方中小都市では、大学進学を機に若者の数が減少してしまう問題がある。そこで本研究は、ポストコロナにおける地方中小都市と大学生とのハイブリッド型の交流に効果的な要素を明らかにし、交流をデザインする現場において活用可能な方法を提案し、その効果を検証することを目的とする。インタビュー調査の分析から、ハイブリッド型の交流に効果的な要素をプログラムの入口、中身、出口の3つに分けて明らかにした。これらの要素をパターン・ランゲージの手法を用いて16個のパターンにまとめ、カードを作成した。ワークショップによる効果検証を経て、大学のないあらゆる地方中小都市で活用できる一般化したパターンカードを作成した。

キーワード パターン・ランゲージ、ハイブリッド型、遠隔コミュニケーション、対馬グローバル大学、さとのば大学

1. はじめに

近年、過疎化によって地方圏における人口5万人程度以下の地方中小都市の活力低下が深刻となっており、それらの都市に居住する若者の大都市への流出が加速している。その理由の一つとして、当該地域に大学が存在しないことが挙げられる。斎尾・太田(2016)によると、2014年時点で全国1,741自治体のうち大学のある自治体は約440であるのに対して、大学のない自治体は約1,300にのぼり、後者のうち97.0%が人口10万人以下、68.9%が人口3万人以下であると共に過疎指定区域を含む自治体が多いことが報告されている。実際に文部科学省(2020)の大学進学時の都道府県別流入・流出者数によると、流入超過が東京都や京都府を含む10都府県、流出超過が37道県となっており、多くの道県で大学進学に伴い、若者が地元を離れていることがわかる。斎尾・太田(2016)は、地方における大学の存在は、単に若者を繋ぎ止めておくだけでなく、彼らが持つ知識や情報活用の点からも、地域課題の解決を模索する上で効果的であると述べる。

このように大学のない地方中小都市では、県外など他地域の大学と連携協定を締結し、大学の知を積極的に活用しようとしている。斎尾・太田(2016)による大学のない自治体へのアンケート結果からは、他地域の大学と連携することのメリットとして「大学の教員・研究者等の専門知識を活用できること」や「大学生と地域住民との交流が図られること」などが挙げられている。その一方で、課題として「遠隔地に大学が立地しているため日常的な連携が行えないこと」や「自治体が期待する効果

と大学が意図する地域貢献や効果にギャップがあること」など、遠隔によることの意味疎通の難しさが見られる。中塚・小田切(2016)も地域と大学のコミュニケーション不足によって「地域の不満・大学の不安」という構図が各地で一般化していると述べる。

そのような課題を解決する一つの方法に「域学連携」がある。域学連携とは、大学生と大学教員が地域の現場に入り、地域の住民やNPO等と共に地域課題に継続的に取り組んで、地域の活性化及び地域に関わる人材を育成する活動である(総務省「域学連携」地域づくり活動)。総務省は、この活動を展開すべく「域学連携」地域活力創出モデル実証事業を実施し、大学のない過疎地や離島などに首都圏や京阪神の大学生がアウトリーチで1~2ヶ月程度滞在し、地域づくり活動を行うことを支援した(蜂屋2014)。大学生にとっては実践経験を通じて地域へのより深い理解が得られ、地域にとっては地域の課題解決や地域おこしに繋がることから、域学連携は双方にメリットが見込まれる。域学連携は全国各地で取り組みが展開されており、特に大学のない地方中小都市にとっては、大学生と交流することで上記のメリットを享受できる貴重な機会となっている。

しかし、コロナ禍の影響で大学生と地域が関わる機会は減少し、対面での活動がメインであった域学連携は各地で中止された。その一方で、大学や地方では、遠隔授業やワーケーションが展開され、オンライン環境を活用した取り組みが進められている。このような背景から、場所に縛られないオンラインツールを活用した域学連携

が行われれば、大学生が新しい形で地方中小都市と繋がることができ、さらには地方中小都市における新たな関係人口増加のきっかけになると考えられる。他にも大学と連携協定を締結していても活動実施まで至っていない自治体も存在していることから、このような課題を乗り越えていくためにも、遠隔地から参加可能なオンラインという手段をより活用していく必要があると考える。

そこで本研究は、1) ポストコロナにおいて大学のない地方中小都市と大学生との対面とオンラインのハイブリッド型の交流に効果的な要素を明らかにすること、2) 明らかにした要素を、域学連携などの大学生と市民が協働する形での交流を企画・設計する現場において活用可能な方法を提案し、その効果を検証することの2点を研究目的とする。

2. 事例調査

2.1. 対馬グローバル大学とさとのば大学

まず、オンラインを活用した地方中小都市と大学生の交流事例やコロナ禍でのそれらの工夫について調査した。その中でも、対面での域学連携をコロナ禍で制限され、オンラインを活用した新たな試みを始めている長崎県対馬市の事例と、校舎のない大学としてハイブリッド型で運営されている「さとのば大学」に着目した。

対馬市（2014）によると、長崎県対馬市の事例では、対面での域学連携として短期的なものから長期的なものまで複数の形式があり、学生の希望に応じた幅広い学習環境を提供している。そして、コロナ禍での工夫として始まった対馬グローバル大学でも、オンラインの学習環境を活用することで、オンデマンド形式の「web 講義」、月1回のオンラインゼミと現地でのフィールドワークを組み合わせる「オンラインゼミ」、そして、オンラインツール上を用いて受講生同士で質問や疑問などの情報交換ができる「仮想研究室」の3つを柱に、対馬市民と全国各地の大学生がオンライン上で交流できるようになっている（前田 2020）。

さとのば大学は、「地域を巡りながら仲間と学び合う大学」がコンセプトの市民大学で、オンラインで勉強をしつつ、実際に全国各地の地域を1年ごとに巡りながらプロジェクト実践力を身につけていくものである。さとのば大学では、オンラインで学んだことを活かして対面でのプロジェクトを行うという流れが一貫しており、オンラインと対面の授業内容や時間区分の違いが明確となっている。しかし、対馬グローバル大学とさとのば大学におけるハイブリッド型による運営の効果や課題について文献だけでは明らかにすることができなかったため、対

馬グローバル大学の運営者である崔氏へのインタビュー調査を2022年6月に、さとのば大学のコーディネーターを務める黒井氏へのインタビュー調査を2022年8月に実施した。

2.2. 対馬グローバル大学運営者へのインタビュー調査

まず崔氏は、対馬グローバル大学のオンライン開催による大きなメリットとして「時間や場所の制約の緩和」を挙げており、対面だと費用面から招聘できる講師が限定されていたが、オンラインによって多様な講師を招いて幅広い講義内容を展開しやすくなったという。また受講生も、過去に域学連携で対馬を訪問した者がオンラインで参加できるようになったという。一方で、デメリットとして「現地を体感できないことによるプログラムの魅力半減」が挙げられた。このデメリットは、同じくオンラインでの域学連携を展開している兵庫県洲本市でも見られ、オンラインやリモート環境では「実感すること」が困難となることが指摘されている（高橋 2021）。実際に対馬グローバル大学では、実際に対面でのプログラムがないことを理由に、途中で受講を辞めてしまった大学生がいたとのことである。こうした経験から崔氏は、ポストコロナにおいてはオンラインだけでなく、対面との併用が必要と考えているようである。

また、オンライン開催によって大学生と市民の交流が対面時と比べて減ってしまうのではないかと予想していたが、オンラインツールを駆使することで双方が協働してプロジェクトを進められることがわかった。しかし、高齢の市民にとってはオンライン環境に慣れることのハードルが高いため、市民向けのオンラインツール講座を適宜開催しているという。実際に講座に参加した方からは、「受講前はZoomなど全くできなかったが、試行錯誤しているうちにやり方を覚えていろいろな活動ができた」という声があったそうである。

2.3. さとのば大学運営者へのインタビュー調査

さとのば大学は「いかに自分でテーマを探せるか」がポイントであり、マイプロジェクトという、身の回りの課題や関心をテーマにプロジェクトを立ち上げ、実行することを通して学ぶ、探究型学習プログラムを取り入れている。初めから活動内容が決まっていなかったことは一見不安に思えるが、地域で活動してみたいがやりたいことがまだ明確でない場合でも、それを探していくところから始めることができ、そのためのサポートも受けられるため、受講生は安心して取り組めるという。

オンラインでの活動で意識していることとして、主に

「授業の開始時と終了時にチェックインとチェックアウトの時間を作ること」、「講義後のコミュニケーション時間を取ること」、「カメラオン・チャット機能での発信」、「Google ドキュメントの活用」の4点が挙げられ、いずれも講師と受講生、及び受講生同士のコミュニケーションが重視されている。黒井氏は、一方的な講義の配信だけではなく対話を大事にしており、その時間の多さが大学生の途中離脱を防ぐことに繋がっていると述べる。

さらに、ポストコロナにおいて目指す交流の形について黒井氏は、現在と同じくオンライン講義と現地でのプロジェクト学習を組み合わせる形を続けていきたいと述べる。元々さとのば大学は、校舎がない学校としてオンラインで企画されていたため、コロナ禍でその良さがより明確になってきたようである。対面とオンラインのハイブリッド型については、それぞれ全く違う内容で設定するべきであると感じているようで、対面の内容をそのままオンラインに移行すると、やはり対面の方が良かったとなりがちで失敗に繋がりがやすいという。

そして、大学生が実際に地域に入って活動するさとのば大学が最も大事にしていることは、学生の自身の成長である。その中で、あまり地域における交流人口の増加などを目的として押し出しすぎると、学生は自分たちが利用されていることに気づく可能性があるという。その一方で、地域側が学生を受け入れることは容易なことではないため、地域側にも何らかの形でメリットがあるべきとも考えているようである。

2.4. 運営者へのインタビュー調査のまとめ

表1は、対馬グローバル大学とさとのば大学の運営者へのインタビュー結果をもとに、対面とオンラインのハイブリッド型による運営の効果や課題、活動形式、そして市民との交流についてまとめたものである。

表1 両大学におけるハイブリッド型の効果、課題、活動形式、オンライン上での交流のまとめ

	対馬グローバル大学	さとのば大学
効果	・幅広い講師を招くことができる ・参加する学生の多様化	オンラインでプロジェクトの基礎を学び、それを対面で実施することで、学生の成長に繋がること
課題	途中で受講を辞めてしまう人がいること	実際に地域へのメリットを生んでいくこと
活動形式	分野ごとのゼミに分かれて、そのテーマに沿って興味のあることを学習	あらかじめテーマは決まっておらず、やってみたいことを探りながら活動を進める
オンライン上での学生と市民の交流	あり。オンライン上で双方が協働してプロジェクトを進める。	なし。ただし、地域コーディネーターと学生の関わりはある。

活動内容について、テーマに沿って活動していく対馬グローバル大学と、テーマを探りながら活動していくさ

とのば大学で大きく異なっていることがわかる。また、さとのば大学では、学士の取得を目指していることから学生へのメリットや成長といった視点が大きく、一方で対馬グローバル大学では地域の人材育成といった目標があるため、地域視点が大きくなっている。オンライン上での学生と市民の交流については、対馬グローバル大学は両者が一緒に参加できるゼミがあり、そこでの交流が生まれているが、さとのば大学では地域住民とのオンライン上での直接的な交流は見られない。このように活動上の相違点はあるものの、インタビューからは両事例ともポストコロナでは共通して対面とオンラインのハイブリッド型を継続する予定であることがわかった。

ここまでハイブリッド型に対する運営側の視点は明らかになることができたが、受講生側の視点については見えていない。ハイブリッド型の交流に効果的な要素を明らかにするために、特にオンライン上での市民と学生の交流がある対馬グローバル大学に着目し、次に対馬グローバル大学の受講生へのインタビュー調査を2022年9月から10月にかけて実施した。

2.5. 対馬グローバル大学受講生へのインタビュー調査

インタビュー調査の対象者は島外在住の社会人1名、現役大学生1名、対馬市民2名である。幅広い層の受講生を対象とすることで、それぞれの立場から感じる対馬グローバル大学における利点や運営に対する要望を明らかにする。さらにそれらを整理し、運営側へのインタビューと照らし合わせることで、ハイブリッド型での交流に効果的な要素を明らかにすることを調査目的とした。

表2 受講者へのインタビュー結果のまとめ

	立場	居住地	感じる利点	運営に対する要望
受講生①	学生時代に対馬と関わりを持ち、現在は社会人として受講	島外	オンラインだと仕事をしながらでも参加しやすい	・より深く学べるような内容のゼミがある とよい ・客観的な視点を持ち、島外の人を意識した活動にすること ・モチベーションを保つ工夫が欲しい
受講生②	現役大学生として受講	島外	オンラインツールを駆使した交流方法が使いやすい	・地域住民の悩みや意見をもっと聞いてそれらを提案に取りたい・対馬感を感じられる工夫
受講生③	対馬市民として受講	島内	自身の興味のある分野について全国各地の仲間と学び合える	・継続して開催していくこと
受講生④	対馬市民として受講	島内	自身の興味のある分野について学生からの知恵や意見をもらうことができる	・継続して学び続けられる環境・取り組みを可視化して冊子などでまとめる支援 ・運営側の体験もしてみたい ・よりわかりやすい内容のオンラインツール講座

表2は、調査対象者の概要とオンラインに対する利点と運営に対する要望について、インタビュー結果をもとにまとめたものである。

感じる利点について、島外に住んでいる受講生はオンライン開催やオンラインツールを駆使した交流方法を挙

げており、共通して主にオンラインの活用方法に関するものであった。受講生Aのように学生時代に域学連携に携わった方が社会人になってからも対馬に関わり続けられるのは、オンラインだからこそできることであろう。一方で対馬市民である受講生CとDは、自身の興味のあることについて学べる機会となっていることを利点と感じていた。特に受講生Dは学生と交流できることに良さを感じており、対馬グローバル大学がそれを体験できる良い機会となっていることがわかった。

運営に対する要望について、受講生Aはより深く学べる環境や客観的視点を持った活動にすること、そしてモチベーションを保つ工夫をすることを挙げていた。学生時代にも域学連携を経験し、現在は社会人として対馬の活動に関わっており、違う立場からの経験があるからこそ、客観的に活動を見ることの重要性に気づいたと推測される。現役大学生の受講生Bは、地域住民との交流を深くすることを挙げており、現状の交流の在り方には物足りなさを感じているようである。対馬市民の受講生は、共通して継続して開催することを挙げており、利点と感じている学習環境の提供継続を要望している。

このようにオンラインツールを活用した交流に利点を感じる人や、自身の関心分野について学べる機会を利点とを感じる人、地域住民との交流をもっと深く行いたいと感じる人や、より深く学べる環境を提供してほしいと感じる人がいることがわかり、受講生の立場によって様々な利点や要望を感じていることが明らかになった。

2.6. ハイブリッド型の交流に効果的な要素

運営側と受講生側へのインタビュー調査を行い、運営方式と受講生らが感じているそれぞれの利点・要望などの結果を照らし合わせることで、ハイブリッド型での交流に効果的な要素が明らかになった。それらを①プログラムの入口、②プログラムの中身、③プログラムの出口の3つに分けて整理したものが表3である。

表3 プログラムの段階別の
ハイブリッド型での交流に効果的な要素

①プログラムの入口	<ul style="list-style-type: none"> ・オンラインツールを市民に普及すること ・対馬グローバル大学の各ゼミのように分野に分かれた環境を用意すること ・一般的な大学とは違う学びができることをよりわかりやすく提示していくこと
②プログラムの中身	<ul style="list-style-type: none"> ・モチベーションの低下を防ぐための工夫を取り入れること ・対馬グローバル大学とさとのば大学で実施しているような共同作業ができるオンラインツールを活用すること
③プログラムの出口	<ul style="list-style-type: none"> ・続けるための工夫をすること ・プログラムを通して実際に地域が変わるなどの成果を出すこと

① プログラムの入口

まずオンラインツールに不慣れな者に対して、対馬市が実施しているようなオンラインツール講座を開催することは良い手段であると考えられる。実際に対馬市民である受講生Dは、講座に参加することによってオンラインツールの使い方を習得していた。より理解しやすい内容の講座を実施することで、多くの市民の参加が見込まれる。また、対馬グローバル大学の各ゼミのように分野ごとの学習環境を用意することで、受講生AとBは自身の興味関心のあることを深められていた。受講生のやりたいことが明確である場合は、そのような学習環境があると学びやすくなると考えられる。反対にやりたいことがまだ明確ではない大学生に対しては、さとのば大学のメンタリング制度やマイプロジェクトなどを通し、段階的にやりたいことを明確にしていく方法が効果的であると推測される。特に大学生には一般的な大学と違う学びできることをよりわかりやすく提示していくことが、大学生の域学連携への参加を促すことに繋がる。

② プログラムの中身

プログラムの中身に関して、社会人である受講生Aはモチベーションを保つ工夫が欲しいと感じていた。その工夫としては、例えば参加者のモチベーションの度合いごとに学習コースを設定し、段階に応じて受講できる環境を用意することや、定期的な活動時間以外に集まる機会を用意することが有効となり得る。そして、さとのば大学のように、悩みを持った受講生をサポートしていくことで、受講を途中で辞めることを防げると考える。

また、運営側である対馬市としては対馬グローバル大学におけるオンライン上での学生と市民との交流は十分にあるという見解であったが、現役大学生である受講生Bはその交流に物足りなさを感じていたり、もっと市民との対話や交流を望んでいたことから、対面だけでなくオンラインツールをより駆使した交流の機会の創出が望まれる。オンライン上で交流の仕方については、両事例とも共通してGoogleドキュメントやJamboardといったオンラインツールを使用しながら、受講生同士での共同作業を行っている。受講生Bもこの仕組みには良さを感じていたことから、オンライン上での交流においてはこのようなオンラインツールを介した共同作業があると共に参加している感覚も向上すると考えられる。さらに、さとのば大学のようにコミュニケーションの時間、対話の時間を多く取ることはオンライン上でも飽きない工夫として効果的であろう。そして、受講生Cは自身の所属するゼミでの活動が、自身の学びだけでなく、

お互いの研究に協力し合う関係を構築することができたと述べていた。このことから、ゼミで学んだことをより深めてみたいと感じた受講生向けに、受講生同士で学びを深められるような時間や場を運営側からも提供していくと、受講生にとってより視野の広い学びが実現できる。

③ プログラムの出口

対馬市民である受講生 C と D の両名とも対馬グローバル大学を継続して開催して欲しいと述べていることから、持続可能性のための何かしらの工夫が求められる。また、受講生がプログラムを通じて、何をどのくらいできるようになったかを明確にし、達成度を確認できるようにするためには、さとのば大学のマイプロジェクトのように取り組む内容の中で段階的なレベル設定を定めることが効果的であると考えられる。そして黒井氏が述べたように受講生だけでなく、地域へのメリットを還元できるよう、プログラムを通して地域が実際に変わるなどの成果の見える化も求められる。

3. 交流デザインのためのパターンカードの制作

両大学の運営者、及び対馬グローバル大学の受講生へのインタビュー調査を通して、ハイブリッド型での交流に効果的な要素を明らかにすることができた。しかし、実際に大学のない地方中小都市が大学生との交流を試みた際、これらの要素をどのように活用して交流を企画・設計できるかは定かではない。この問題を解決するための方法として本研究では「パターン・ランゲージ」というデザイン手法に着目した。

パターン・ランゲージは、物事を多角的な視点から言語化して分かりやすく整理し、それに名前(パターン名)をつけていく手法であり、建築のデザインやソフトウェアのデザイン、さらに教育など人間行為のデザインなどに幅広く活用されている(井庭 2013)。パターン・ランゲージでは、ひとつの要素を「状況」「問題」「解決」「アクション」「効果」の5つに分類して整理することで、デザイン経験の有無に関わらず知識や情報を多くの人たちと共有できるという特徴と強みを持つ。そこで本研究では、インタビュー調査によって明らかになったハイブリッド型での交流に効果的な要素をパターン・ランゲージの記述方式に基づいて整理し、「対馬グローバル大学のポストコロナにおける交流デザイン」のパターンを作成することにした。作成されたパターンを活用することで、立場や知識が異なる主体がハイブリッド型の交流を協働して企画・設計する際の手助けになると考えた。

パターン作成のプロセスは、1) 筆者の視点で第一パタ

ーンを作成する、2) 作成した第一パターンについて、第三者である2名を交えて議論をしながらパターンが的確であるかの検討を行う、3) 検討を繰り返しながら、最終的なパターンを作成する、という流れである。第三者との議論を取り入れることで、パターン同士繋げられそうな組み合わせが見つかったり、新たにパターンとして追加すべき内容が見つかったり、パターンの個数を増減させながら内容を明確にしていくことができた。そして、最終的に表4に示した16個のパターンを作成した。

表4 対馬グローバル大学のパターン名一覧

1	オンラインツールの普及	9	ゼミ活動以外の機会
2	サポート体制	10	深められる環境
3	興味・関心ごとの空間	11	現地の体感方法
4	モチベーションごとの空間	12	地域の方との深い交流
5	学生への宣伝	13	目標達成度合い
6	大学との違い	14	成果を出す
7	双方へのメリット	15	成果物の共有
8	オンラインでの共同作業	16	続ける工夫

表5 パターンの一例

パターン名	パターンの説明	状況	問題	解決	アクション	結果
4. モチベーションごとの空間	やってみたいことの度合いごとに集まれる環境を用意する	少し興味のある人や、深くまで取り組んでみたい人など、様々なモチベーションの人がいる	集まった時に、その度合いの差が生じている可能性がある	コースを段階的に複数用意する	モチベーションや難易度に応じたコースを複数用意し、やってみたら気に入ってもらえるようにする	・途中で脱落してしまふことを防ぐ ・次回にステップアップしたコースへの参加を促す
6. 大学との違い	一般的な大学との違いを示し、何が学べるのかをわかりやすく提示する	グローバル大学の魅力は多くある	参加することでのような学びが得られ、何が学べるのかをわかりやすい場合がある	大学とは違った学びや面白さを示す	・ゼミという名称を工夫したり、大学との違いを示す ・参加することでのようなプラスが生まれるのかを具体的に提示する	・学生にとって面白く貴重な体験ができることを知ってもらい、参加を促す
7. 双方へのメリット	学生が地域、どちらか一方のメリットにならないようにする	プログラムを通してメリッを生みたい	地域が学生のどちらか一方のメリットに偏ると、利用されている感が生まれたり、やりたいことへのキャップが生じてしまう恐れがある	地域側と学生側の要望ができるだけ合致するようプログラムを作る	両者の要望を調査し、それに沿ったプログラムを検討する	継続したより良い関係づくりに繋がる
12. 地域の方との深い交流	学生と地域の方々のより深い交流を目指す	プログラム上で、地域の方のお話を聞きたい	一部の地域の人の意見、考えが聞けず、物足りなさを感じてしまふ人がいる	できるだけ多くの地域の方の意見を取り入れられるよう工夫する	元々頑張っている方の取り組み紹介等で終わらせず、地域の方へのヒアリングや対話の機会を作り、地域住民の声をできるだけ取り入れるようにする	・物足りなさの解消 ・よりリアルティのある提案に繋がられる
16. 続ける工夫	変化を取り入れながら続けていく	今後も継続してプログラムを開催していきたい	毎年同じような内容になってしまふと参加者が離れてしまふ可能性がある	毎年違った内容を取り入れてみる	参加者で内容を企画するプログラムやゲストを招くなど様々な方法を検討する	受講生は毎年様々な体験ができ、新鮮な内容を楽しんでもらえる

表5は、パターンの一例を示したものである。「状況」、「問題」はインタビュー調査によって明らかになった内容を記述し、「解決」、「アクション」はインタビュー調査を通して取り入れたものや考えたもの、また、既に実施されているもので続けていくべきであると感じたものを記述している。パターン名に、ある程度の抽象度(中空の抽象度)を持たせることで、状況や解決方法などを想像しやすく、内容が膨らみやすいようにすることを意識

した。また、ひとつずつパターンごとに整理を行うことで、どのような問題があり、どのように解決していくべきかを分かりやすくすることができた。

表でまとめたものは、初めて見る人には文字ばかりで内容が分かりづらいため、それぞれのパターンごとにカードとしてまとめることとした。カード化に当たっては、クリエイティブシフト社のサイト

(<https://creativeshift.co.jp/pattern-lang/>) において、人間行為のコツをパターン・ランゲージで示すためのものとして例に挙げられているものを参考にした。しかし、参考としたカードデザインについて、全体的に色味がなく無機質な印象であることと、文字で読ませる負担が重く、内容の理解に時間がかかる印象を受けた。そのため、本研究では、パターンの内容がカードの使用者に伝わりやすいデザインを心がけ、誰にとっても使ってもらいやすいようにすることを意識した。図1は作成したカードの一例である。なお、対馬グローバル大学のすべてのパターンカードは註1に示したリンク先より閲覧できる。



図1 対馬グローバル大学のパターンカードの一例

カードは、表面と裏面から成る構成とした。表面はパターンの概要として「パターン番号」、「パターンの名称」、「パターンの説明」、「イメージ図」を載せ、裏面にはパターンの詳細として「状況」、その状況において起こる「問題」、その問題の「解決」方法、解決方法の具体的な「アクション」、解決した「結果」を載せている。カードにすることで、表5の内容を視覚的にわかりやすく表現することができた。

カードに記載されている内容について話を広げたり、意見を出し合ったりすることで、対馬グローバル大学における交流をより良くしていくためのアイデアを誰もが簡単に発想・共有することができる。本研究で想定した効果を検証するために、作成したカードを活用したアイデア発想ワークショップを行った。

4. パターンカードを用いたアイデア発想ワークショップ

4.1. ワークショップの概要

アイデア発想ワークショップの目的は、作成した対馬グローバル大学のパターンカードを活用し、ポストコロナにおける対馬グローバル大学をより良くしていくための交流デザインのアイデアを発想・共有することである。アイデア発想ワークショップは、2022年11月10日にオンラインで開催した。当日は対馬グローバル大学事務局の崔氏と高田氏、そして対馬グローバル大学を受講している武田氏に参加いただいた。なお、参加者の氏名を掲載することは、事前に三名の同意を得ている。

アイデア発想ワークショップの進め方は、作成した16のパターンの中から事前に5つのパターンを選んでおき、それぞれのパターンについて、1パターンにつき8分間アイデアや意見を自由に出し合っていく形式とした。事前に選んだパターンは、「4.モチベーションごとの空間」、「6.大学との違い」、「7.双方へのメリット」、「12.地域の方との深い交流」、「16.続ける工夫」の5つである。これまでのインタビュー調査を通じて明らかとなった対馬グローバル大学において優先的に検討すべき内容を含むものを抽出した。

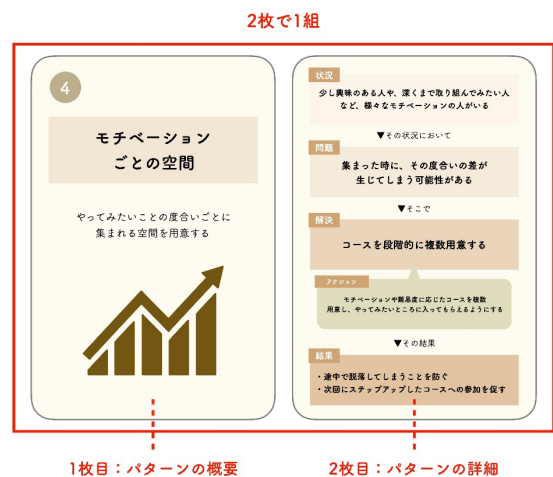


図2 オンライン用のカードの構造

作成したカードは本来表面と裏面から成るものであるが、今回はオンラインでのワークショップであるため、図2のように表面を1枚目、裏面を2枚目とし、2枚で1組の扱いとした。そして、カードに記載されている解決方法は一例であり、議論をするための材料として使うことを示し、カードから話が広げられるようにした。アイデア発想ワークショップの全体の流れは以下の通りである。なお、ワークショップのファシリテーションは筆者の大宮が務めた。

- I. ワークショップの意図、目的について説明する (10分)
- II. カードの仕組みや構造について説明する (5分)
- III. ワークショップの流れについて説明する (5分)
- IV. 事前に選んだカードを読み、意見やアイデアを出し合う (8分間×5組=40分間)
- V. 参加者に対してカードの使用感に関する質問 (15分)

4.2. アイデア発想ワークショップの結果と考察

アイデア発想ワークショップを実施した結果、以下の4つの気づきを得ることができた。

1つ目は、カードの内容について前向きな意見と、実現することが難しいという意見の両方が得られた点である。前向きな意見では「次年度は取り入れてみたい」、「検討したい」、「その視点は重要そうである」などが挙げられる。インタビュー調査で明らかになった要素をカードとして共有することで、それらの要素を実際に活用してもらうための一歩とすることができたと考える。一方で、実際には事務局のマンパワーの面からも実現は難しく、別の方法も検討できれば、という意見も出された。これらに関しては、インタビュー調査では明らかにならなかった現場の問題を当人たちが認識できたと考える。

2つ目は、カード同士の繋がりが見え、連動性があったということである。話し合いの中で「この話題はこのカードの内容とも対応しそうである」というやりとりが何度も見られ、会話が広がることがあった。インタビュー調査の結果をそのまま言葉や文章で伝えるだけでは、ここまで問題同士の繋がりを明確にすることはできなかったであろう。パターン・ランゲージを活用して状況、問題、解決方法などを整理し、さらにカードで視覚的にも分かりやすくすることによって得られた結果であると考えられる。

3つ目は、カードの内容について深めることも、カードの内容から発展させることもできたという点である。今回のワークショップにおいては、カードに書かれている内容に沿って話が進んだ場合と、カードに書かれている内容以外のアイデアが生まれたり、または別のカードとの関連性が見えてきたりする場合は2通りがあった。カードに書かれている内容に沿って話が進んだのは「6. 大学との違い」のみで、他の4つパターン「4. モチベーションごとの空間」、「7. 双方へのメリット」、「12. 地域の方との深い交流」、「16. 続ける工夫」ではカードの内容から発展し、話が広がっていく様子が見られた。このことから、カードからアイデアが出てくるプロセスは一通

りではないことも確認できた。

4つ目は、カードの見方は使ってもらった対象者によって異なるという点である。V.のカードの使用感に関する質問において、事務局の方からは「カードを作成した意図を共有してほしい」という意見が寄せられた。また、話し合いの中でも事務局の方がカードの内容に関して「なぜこのようなことを問題と感じたのか」という質問が挙がり、それに対して筆者が回答する場面があった。事務局としては、運営側の視点で課題を明確にしたいという思いがあったからこそ、このような疑問が生じたのであろう。しかし、受講生である武田氏からカードを作成した意図について質問されることはなく、武田氏は自身が受講した経験をもとにカードに対する考えを話された。このように、使用してもらった対象者がどのような立場であるかによって、出てくる意見やアイデアなども異なってくると考えられる。多様なアイデアを出すためにはカードの内容をある程度抽象的にしておく必要があるが、その抽象度合いは難しく、使ってもらった対象者によっては何をどのくらい具体的に提示すべきか、をカードの作成時点で想定しておくとも良いかもしれない。また、今回のワークショップでは、先に述べたように事務局の方のカードに関する質問に対して筆者が回答する場面があったが、カードの作成者がアイデア発想ワークショップの場にいらない場合だとカード作成の意図が参加者にはわからないため、また別のアイデアが生まれる可能性もあると考えられる。

5. 一般化したパターンカードの制作

ワークショップの結果と考察に基づいて「大学のない地方中小都市と大学生を繋ぐポストコロナにおける交流デザイン」のパターンを作成し、新たに1個のパターンを追加して17枚のカードにまとめた。表6は一般化したパターン名一覧である。グレーで示した「1. 共同して取り組むプログラム」を新たに追加し、「10. 交流の機会」を「ゼミ活動以外の機会を」から名称変更した。

表6 一般化したパターン名一覧

1	共同して取り組むプログラム	10	交流の機会
2	オンラインツールの普及	11	深められる環境
3	サポート体制	12	現地の体感方法
4	興味・関心ごとの空間	13	地域の方との深い交流
5	モチベーションごとの空間	14	目標達成度合い
6	学生への宣伝	15	成果を出す
7	大学との違い	16	成果物の共有
8	双方へのメリット	17	続ける工夫
9	オンラインでの共同作業		

対象とする地方中小都市として、離島や交通の条件や自然的条件から大学生が域学連携のために定期的に移動することが困難な僻地を想定したが、これらの条件に合致しない都市であっても適用できるよう配慮した。具体的には「対馬グローバル大学のポストコロナにおける交流デザイン」のパターンから改善すべき要素や追加すべき要素を下記の7点に整理した上で、パターンを作成した。なお、一般化したすべてのパターンカードは註2に示したリンク先より閲覧できる。

1) 大学のない地方中小都市においては、大学生との交流の機会として、まず対馬グローバル大学のように対面とオンラインのハイブリッド型での交流プログラムを設けることが必要であると考え。そのため、既存の16個のパターンに加えて「共同して取り組むプログラム」というパターンを新たに作成した(図3)。対面とオンラインのハイブリッド型で、地域住民と大学生と一緒に取り組めるようなプログラムを設けるといものである。

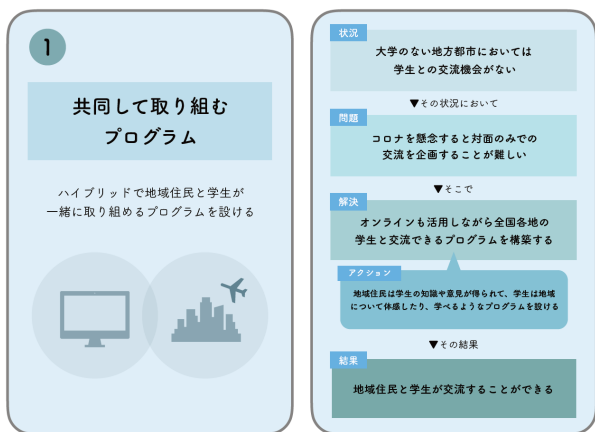


図3 「共同して取り組むプログラム」のパターン

2) 対馬グローバル大学のパターン内で用いている「ゼミ」や「受講生」という名称は限定的であるため、前者は「コース」や「交流の場」、後者は「参加者」という汎用性の高い名称を用いて、より広く使えるようにした。

3) 対馬グローバル大学の「4. モチベーションごとの空間」では、コースを段階分けすることを挙げていた。このパターンに対してワークショップでは、「必要性は感じるが、モチベーションごとに空間をただ分けるだけでなく、その中で行う個人ワークとグループワークのバランス設定も重要視すべき」という意見や、「コースを分ける以外の方法として、発展的に学びたい受講生向けに集中講義を行う」というアイデアが挙げられた。そのため、アクションの中に「個人ワークとグループワークのバランスを考慮すること」と「集中講義などで深く学べる機会を作ること」を追加した(図4)。



図4 「モチベーションごとの空間」のカード

4) 対馬グローバル大学のパターン「6. 大学との違い」は、主に大学生視点での言及であった。このパターンに対してワークショップでは、「ターゲットに学んでほしいことを定め、そのような学びができることをわかりやすく示していくべき」という意見が挙げられた。大学のない地方中小都市と大学生の交流においては、大学生だけでなく地域住民も重要なターゲットとなる。そのため、アクションの中に「プログラムの名称の工夫などにより、大学生だけでなく、地域住民から見ても一般的な大学との差がわかるようにすること」を追加した。

5) 対馬グローバル大学のパターン「7. 双方へのメリット」では、プログラムの内容を双方の要望が合うようにすることを挙げていた。このパターンに対してワークショップでは、「プログラムの内容の工夫以外にも学生スタッフを役割として設置すれば、運営を体験してみたい学生が参加でき、さらに受講生の地域住民においても学生スタッフに受講の手助けをしてもらえるのではないか」という意見が挙げられた。そのため、アクションに「参加者以外の役割として学生スタッフを設ける」を追加した。

6) 対馬グローバル大学のパターン「5. 学生への宣伝」では、主に成果や受講の様子をSNSで発信することを挙げていた。これに加え、ワークショップにおいて取り上げた「4. モチベーションごとの空間」、「6. 大学との違い」、「7. 双方へのメリット」の特徴を、大学生によりわかりやすく示すことも効果的であると考え。ゆえに、それらの特徴を発信することをアクションに追加した。

7) 対馬グローバル大学のパターン「16. 続ける工夫」は、リピーターの受講生にとって新鮮な内容を取り入れていくというものであった。このパターンに対してワークショップでは、「リピーターの受講生向けに内容を変えることを意識するだけでなく新しく入ってきた受講生向けの視点も大事である」という意見や、ゼミ生が学んだ

ことを資料や冊子として残し、それを次年度も見られるようにすれば、新しく入ってきた受講生もそれらを参考にすることができるだろう」という意見が挙がった。そのため、「リピーターの参加者だけでなく、新しく入ってきた参加者も取り組みやすい環境を作ること」をアクションに追加した（図5）。

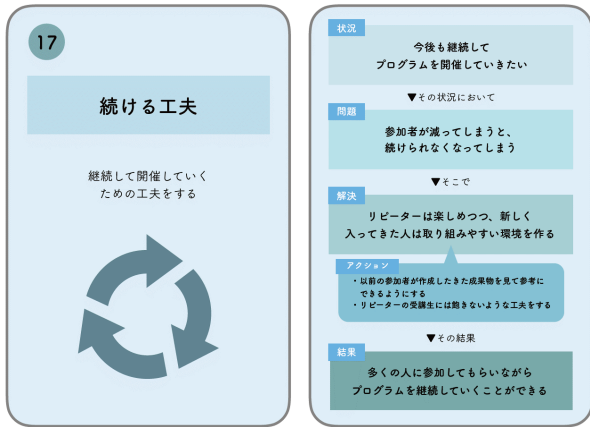


図5 「続ける工夫」のカード

6. 一般化したパターンカードの使用方法

今回作成した一般化したパターンカードは、主に2つの使い方ができると考える。

ひとつは、大学のない地方中小都市において大学生との交流を試みる際に、このカードに記載された「解決」とそれに付随する「アクション」をそのまま実践するという使い方である。制作したカードには、どのようなプログラムを取り入れるべきかやオンライン上での活動で具体的に考慮すべき点について書かれている。それらを参考に交流を企画すれば、大学のない地方中小都市において全国各地の大学生との交流プログラムを実現できると考える。

もうひとつは、大学のない地方中小都市において大学生との交流を既に実施している場合に、その活動の振り返りや、さらに活動を良くしていくためのアイデア発想を支援するツールとして使う方法である。カード同士を組み合わせながら活動の現状を整理して課題を明確にしたり、1枚のカードについて意見を出し合いながらより良いプログラムの内容について議論したりすることができる。

このように、大学のない地方中小都市において新たに大学生との交流を試みる際と、既に交流を実践している場合の両方の状況において、制作したパターンカードを活用することができるだろう。

7. 結論

本研究では、大学のない地方中小都市と大学生のハイブリッド型の交流を実践している2つの事例の運営者、及び受講者へのインタビュー調査を行い、それらの結果の分析から、ハイブリッド型での交流に効果的な要素を明らかにした。明らかにした要素をもとにして対馬グローバル大学における交流デザインのパターンを作成した。作成したパターンをカードにまとめる際には、従来のカードからは全体的に色味がなく無機質な印象であることと、文字で読ませる負担が重く、内容があまり入っていない印象を受けたため、内容が伝わりやすく、かつ視覚的にも負担にならないカードを作成した。さらに作成したカードを活用したアイデア発想ワークショップを実践することで、カードの有効性を検証するだけでなく、対馬グローバル大学における現状の活動の振り返りや、新たな交流デザインのアイデアを生成することができた。新たに一般化したカードは大学のない地方中小都市において大学生との交流をデザインする際だけでなく、実際に交流を実践している場合の活動の振り返りとしても使用できると考える。

「対馬グローバル大学のポストコロナにおける交流デザイン」のパターンは、カードを用いたアイデア発想ワークショップにおいて、主に事務局の方にのみ検証した。受講生である大学生や対馬市民にカードを使ってもらう場合には、カードの内容の抽象度合いやワークショップの進め方、そして実際に出るアイデアや意見も異なってくると考えられる。ゆえに、その際の具体的なファシリテーションの方法を検討していく必要がある。

最終的に作成した「大学のない地方中小都市と大学生を繋ぐポストコロナにおける交流デザイン」のパターンにおいても、効果検証ができていない。特に、大学のない地方中小都市において大学生との交流デザインをする際に、作成したカードを活用できるかどうか検証する必要がある。しかしながら、今回作成したパターンは、大学のない地方中小都市と大学生の交流デザインにおいてだけでなく、オンラインを活用した授業やイベントの企画など、様々な機会においてハイブリッド型の交流を検討する際にも活用できるものであると考えている。これらカードを活用できる機会が増えれば、コロナ禍だけでなくポストコロナにおいても、効果的なハイブリッド型の交流を実現することができるだろう。

謝辞

本研究にご協力いただいた、さとのば大学地域事務局の黒井様、対馬市役所 SDGs 推進室、及び対馬グローバル大学の受講生の皆さまに感謝します。

註

1) 対馬グローバル大学のパターンカード一覧：

https://prescu-my.sharepoint.com/:b:/g/personal/b90067_scu_ac_jp/EQENkeTsl7xLjcAFZXWGlrgB-QR7lkikJadxFTNRiwStjg?e=8FvZ6k

2) 一般化したパターンカード一覧：

https://prescu-my.sharepoint.com/:b:/g/personal/b90067_scu_ac_jp/EWh-wWg1NcBLm7eGG8Ng828Bbtb3uofD1b-YIMVsFoYVNw?e=WMiONm

参考文献

- [1] 蜂屋大八, 2014, 大学と地域との連携事業における関係性の考察, 宇都宮大学地域連携教育研究センター研究報告, 22, 19-28.
- [2] 井庭 崇, 2013, 創造的な未来をつくるための言語, パターン・ランゲージ 創造的な未来をつくるための言語, 井庭 崇 編著, 慶應義塾大学出版社, 1-37.
- [3] 株式会社クリエイティブシフト, パターン・ランゲージとは, <https://creativeshift.co.jp/pattern-lang/> (2023/12/01 参照).
- [4] 前田 剛, 2020, 域学連携による関係人口づくり：長崎県対馬市を事例に, 人間環境論集, 法政大学人間環境学会, 21(1), 51-84.
- [5] 文部科学省, 2020, 魅力ある地方大学の実現へ向けて (仮称) (素案) 参考資料集, 36-37. <https://www.mext.go.jp/content/000141270.pdf> (2023/12/01 参照).
- [6] 中塚雅也・小田切 徳美, 2016, 大学地域連携の実態と課題, 農村計画学会誌, 35(1), 6-11.
- [7] 斎尾直子・太田真央, 2016, 地域課題解決に向けた大学と地域との連携実態と自治体の姿勢, 農村計画学会誌, 35(1), 22-26.
- [8] さとのば大学, <https://satonova.org/> (2023/12/01 参照).

[9] 総務省, 「域学連携」地域づくり活動

https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/ikigakurenkei.html (2023/12/01 参照).

[10] 高橋 壱, 2021, コロナ禍での都市部大学生との連携による地域づくり活動, 農村計画学会誌, 40(1), 32-33.

[11] 対馬グローバル大学 <https://tsushimaglobal-u.com> (2023/12/01 参照).

[12] 対馬市, 2014, 対馬市域学連携地域づくり推進計画 <https://www.city.tsushima.nagasaki.jp/gyousei/soshiki/shimadukuri/sdgs/ikigaku/728.html> (2023/12/01 参照).

Abstract

In regions without universities, a nationwide challenge arises as young individuals often leave their local communities upon pursuing higher education. In the post-COVID era, this study focuses on identifying effective elements for hybrid face-to-face and online interactions between non-university local cities and university students. Furthermore, the study aims to propose methods for utilizing these elements in the planning and design of interactions on the ground. From the results of interview surveys, effective elements for hybrid interactions are categorized into program entry, content, and exit. To facilitate sharing and utilization of these elements among those planning and designing interactions, the study employs the "Pattern Language" method to create 16 patterns titled "Interaction Design in the Post-COVID Era for Tsushima Global University." Additionally, tools are developed to enhance the utilization of these elements, and practical workshops using the created tools are conducted. Based on the results of these tools and workshops, a tool applicable to non-Tsushima municipalities without universities is devised, aiming for broader application in local cities without university.